

利休切腹の謎

2020年8月19日

我部山 民樹

1. はじめに

テレビ番組で文教大学教授の中村修也氏が「利休は木像磔の後、切腹してなくて生存していた。秀吉が実母に宛てた書状が根拠の一つである」との説を唱えていた。以前より、晩年の秀吉が残虐になっていたかもしれないが「いくら何でも町人を切腹させた」ことに違和感があったので調べてみることにした。

2. 利休の死に至る通説

1591年の

- ・1月22日 利休最大の擁護者豊臣秀長死没（秀吉の弟）
- ・2月13日 突然京都を追放され、堺の自邸に蟄居させられる
- ・2月25日 利休の木像が大徳寺山門の楼上から引きずり下ろされ、堀川
の一条戻り橋で磔にされる
- ・2月26日 上洛を命じられ、聚楽第近くの葎屋町の自邸に入る
- ・2月28日 切腹する（数え年で70歳）
一条戻り橋に首を木像の足で踏みつけた状態で晒される



利休の画像



利休木像安置の大徳寺山門



現在の一条戻り橋



磔にされた利休の木像

多くの説は事件60年後の「千利休由緒書」（表千家4代目千宗佐が幕府の要請により提出）をベースにしている、それで通説が出来上がっている。

「千利休由緒書」

(利休の孫で千家中興の祖といわれた宗旦が存命中で、宗旦や利休を知る人々に宗佐が聞き合わせて書いたとされ、信憑性が高いとされている。)

千利休の死に至る過程のご下門に対し

「1590年11月に秀吉公より勘当される。1591年正月13日に堺に追い下され閉門、2月26日に命により帰京する。上杉景勝の3,000名以上の軍勢に自邸を取り固められた。28日に尼子三郎左衛門、安威摂津守、蒔田淡路守の3名を検使に迎え、弟子の蒔田の介錯で切腹。生首が一条戻り橋に置かれた。」とある。(このようなシーンを伊達政宗の大河ドラマか何かで見た記憶がある。)

「咎は大徳寺山門に端を發する利休の木像安置が無礼千万とのこと、無双の出世を遂げたので、讒言する輩もいて、それを耳にした秀吉公が機嫌を損ねたのであろう。」

また、秀頼の小姓、古田九郎八の直談として十一縫伝助の物語を記載している。

「1589年2月秀吉が鷹狩りに出かけた時に類稀な器量の女房が子供を3人連れていているところを見かけ、小姓に素性を聞かされたところ、利休の娘(次女)で堺の茶人万代屋宋安(もずやそうあん)の後家と分かった。聚楽第に帰ってから奉公に出るよう書状を出したが断られ、その後利休に3度も奉公に出すように命じたが、利休が頑として受け入れなかったので、秀吉公が甚だ恨むようになった。いずれ罪を見つけて罰してやろうと思っていた時に木像安置の話が耳に入りついに懲罰された。」と。

「私邸を軍勢に取り固められた」との話はこれまでには記録に無く、この時に初めて出てきたので‘創作の疑いがあるが、創作するメリットが全く考えられないので事実と解釈する’という歴史家もいる。逆に切腹は当時の一人だけだが、記録にあるので信じるということだろうか。

では当時の記録はどれくらい有って、切腹はどの程度信頼できるのか？

徳川家康は当時のことを把握できる立場だったので、事件の詳細を知っていたはずである。徳川幕府に資料は残されていないのだろうか？また何故千家に茶道だけでなく‘利休の死に至る過程’まで下門したのだろうか？

そもそも表立っての咎は「高札に書かれた大徳寺山門の楼上に木像を安置したことと茶器の不当利益の2点」であり、賜死(しし)に値する罪が見当たらなくて謎が多いと言える。その裏に隠れた咎を多くの人がいろいろと憶測してきた。江戸時代以降の資料は死に至る根拠を想像し、こじつけもしていると思われるので、安土桃山時代の当時の資料のみで検証する。

3. 利休処罰に関する事件直後の資料

① 2月29日の北野社家日記(きたのもりけ——北野天満宮の宮司)

宋易が茶器の売買で不当な利益を得たかどで成敗され、首が木像とともに晒された。

② 2月29日の奈良興福寺の多門院英俊の日記(多門院日記)

2月28日明け方に数寄者(すきしゃ——芸道に執心な人)の利休が切腹したとの伝聞がある。それは近年、新たな茶道具に法外な値を付けて売り払っていて、不当な利益を上げる売僧(まいす——物を売って歩く墮落僧)の極みであるということと

か、もっての外の事と関白秀吉殿が腹を立てて、磔刑だと仰せなのは、利休自身の木像を京都紫野大徳寺の山門に置いたことで、これが‘秀吉公もくぐることがある山門の上から見下ろすのは不敬にあたる事だとして罪に問われているから’である。また、寿像を磔刑に処され、屋敷を売却し、高野山に登ったという風聞も聞いた。
(全く異なる風聞)

- ③ 2月29日の竹中半兵衛の子息竹中重門の記録(著書豊鑑(とよがみ))
(政権に近いところからの情報をベースにして)

その頃、秀吉公は茶の湯聖となっていた千利休を処刑した。彼は堺の町人であるが、秀吉公の茶の湯の師匠となった。世間で有名となって茶道具の良し悪しは「利休の思うがまま」に道具の値を上げ、富めることは秀吉公にも劣らないと言われるばかりになっている。段々傲慢になり、自分がよいと思うのは出来の悪い物も良い物とし、新物も古い物だと言って値を上げる始末だ。秀吉公はこれを聞いて国賊だと言って、利休を京都から堺の町に帰らせて、斬首刑に処した。奢れる者は今も昔もこのような末路だ。これを見て、今の世の中の人もこれからの人も戒めとすべきだ。

- ④ 2月29日の伊達家の家臣鈴木新兵衛の伊達家重臣石母田景頼への書状
利休の無道の年月を清められて、追放となりその行方も分かりません。聚楽第大門前にある堀川の戻り橋で利休の木像が磔になっている。前代未聞のこと。京都中で評判となっている。その脇には利休の罪科が書かれて、立てかけています。面白い秀吉様のお言葉、これに勝るものではありません。

- ⑤ 伊達藩重臣で、後に亘理伊達藩の当主になった伊達成實の日記
利休が追放処分された後、行方不明になっている。

- ⑥ 2月25日の西洞院時慶(にしのとくいんときよし)の日記
宋易が逐電した。

(同じ日に)奈良で盗賊が捕えられ、京都で処刑され、さらし首になった。

- ⑦ 2月26日の公家の勸修寺晴豊(がじゅういんはれとよ)の日記
(利休と付き合いがあった。)

利休のことであるが曲事があり、逐電(逃亡や追放)した。

木像に雪駄を履かせ、その上杖までつかせたとは、いかにも俗人をあしらったので、とても聖なる大徳寺山門に安置するのはふさわしくなく、関白はじめ天皇、名家、諸大名などの歴々の衆が詣でるのに対し、適正を欠いた行為と見ざるを得ない。

- ⑧ 山科言継(やましなときつぐ)の日記

多くの戦国大名との交流で知られていて、さまざまの情報を入手できたはずなのにこの事件に関し一切書いていない。

- ⑨ 豊後の大友宗麟の国元への書状

諸侯が居並ぶ前で秀長公が‘内々のことは千利休、表向きのことは秀長が承る’と。この度千利休が気持ちを入れて奔走してくれた様子は言い尽くすことが出来ない。今もこれからも秀長公と千利休殿へ、慎重に分け隔てなく親しくすることが肝要である。

⑩秀吉の実母大政所への書状

事件の翌年（1592年）に九州の名護屋城にいた秀吉が直筆で母親の大政所に宛てた手紙に‘利休の茶にて御膳もあがった’と書いている。

（利休は高弟の細川幽斎（小倉）に匿われていて余生を過ごした？少なくとも秀吉が名護屋城（佐賀）に滞在した時期は細川家にいた可能性？）

⑪2月26日の吉田兼見（細川幽斎の従兄弟で京都神社の神主）

利休の木像が大徳寺にある件で、勘気を被り像は聚楽第の橋に晒される。

その件で大徳寺長老が尋問を受けた。

利休の妻と娘が三成に蛇攻めで処刑されたとの噂がある。（事実ではないだろうが、背後に三成がいるはずと思っただろうか？）

その他の記録として

⑫細川家の家史

利休の嫡子道安に300石の領地を与えたという記録がある。

（道安の活動拠点は堺だったので、実際は利休の俸禄だった？）

⑬表千家「千利休由緒書」（徳川家康年譜作成事業に伴い千家系譜を作成。その付属書）

事件から約60年後の1653年、表千家4代目の千宗佐が紀州徳川家に提出した。その中で、‘利休は秀吉に切腹させられた。茶道に殉じた。’と高らかに顕彰した。（千家の名誉回復と豊臣家の政治を批難？）

⑭墨海山筆の「利休伝

（成立年不詳）利休木像を柱に立て締め付け、利休の首を木像に踏ませている。毎日、見物が群衆をなす

1650年頃より、切腹時の詳細な様子（テレビドラマ等でよく見る）が書かれるようになってきたようである。

次に事件直後の資料の記述と著述者をまとめる

・木像を磔刑にした

時慶（2/25）、晴豊（2/26）、兼見（2/26）、
鈴木新兵衛（2/29）、多門院（2/29）

・逐電した

晴豊（2/26）、時慶（2/25）

・追放され、行方不明

鈴木新兵衛（2/29）

・屋敷を売り払い、
高野山に登った

多門院英俊（2/29）

・斬首された

竹中重門（2/29）

・首を一条戻り橋に晒された

北野杜家（2/29）

・28日の朝、切腹させられた。（高野山に登ったという風聞も書いている）

多門院英俊（2/29）

4. 事件の概要

①大徳寺山門木像事件の概要

事件の2年ほど前に利休が私財を投じて山門を改修したが、山門の楼上に利休の像が安置された。‘高貴な方が通る山門の上に草履を履いた利休の木像を置くということは高貴な方の頭を踏みつける行為と同じである。参拝する秀吉がその下をくぐることになる。不届きである。’と咎められた。

木像は寺側が感謝の意で安置したもので、辞退はしなかったけど利休の意志ではない。木像安置を秀長に届け出ていたとの記録が残っている。(秀吉も2年前より承知していたが木像の姿や設置場所は讒言があるまで知らなかったかもしれないし、承知していなかったのであれば讒言により初めて知って激怒したことはあり得る)

(ア) 事件の背景

江戸時代以降の資料も参考にして

- ・「内々のことは利休に、表向きのことは秀長が承る」と豊臣秀長が諸侯に前で話したことがあるほどに政権に重用されていた時期があった(大友宗麟書状)。その後増長して、秀吉に意見をすする利休を秀吉が段々疎ましくなり、表だった咎以外の理由で排除したいと思い始めていたことが背景にある?特に朝鮮出兵に反対したとすればそれは許し難かった?

事件の前年の1950年、利休の一番弟子の山上宗二が利休のとりなしにも関わらず秀吉により処刑され、不満に思う利休と秀吉は相互に気まづくなっていった。

- ・木像を安置したのは2年ほど前であり、何故この時期になって突然事件になったかであるが、利休の最大の擁護者の秀長の死没したので、憚ることなく、表立った咎以外の理由で処罰した。

その理由の一つが通説にある「石田三成他の秀吉側近派が台頭し、利休の政治への口だし、益々増長してくるのが目障りになっていた」ことかも知れない。秀長が死没したので、秀吉と側近派の弾劾が始まった。

その他諸説があるが、いずれも賜死(しし)に値する咎ではないように思われる。逐電させて表舞台から葬り去ればよいことである。逐電させたことを説明しなかったし、口止めしたため、いろいろな風聞が出たのだろう。

- ・「利休めはとかく冥加のものぞかし、菅丞相になると思えば」の和歌を愛娘のお亀(‘おちょう’とも言われた)に残している。利休は菅原道真のように濡れ衣を着せられたと思っている。思い当たる節があったのか?
- ・蟄居の日は当時の記録に見当たらない。江戸時代の武功夜話104に‘2月13日に弟子の富田知信と拓殖左京亮が上使として追放・蟄居を命じる’とある。千利休由緒書では正月13日となっていて日にちが異なる。いろいろな資料により、2月13日が認証されているのだろう。

5. 記録から解釈できること

- ・書き残した方々は比較的政権中枢に近く、正確な情報を得やすいはずだが、処分の情報が錯綜し過ぎている。憶測に基づく噂が飛び交ったためだろう。今日でも確たる原因が不明である。

- ・秀吉が事件の翌年の 1592 年に母親への書状で、‘利休とお茶をした’に対して、多くの学者が、秀吉がぼけて勘違いしたのだろうとか‘利休流のお茶’をしたとかの解釈で利休の生存を否定しているが、素直に読めば‘利休とお茶をした’なのであろう。(中村修也教授の説) 手紙に書いた理由は秀吉が利休の詫言(わびごと一助命嘆願)をしたとされる実母の大政所に極悪非道の鬼のように思われたくないので、‘賜死の噂を聞いたかも知れないが、そうではない。実はこうだと知らせたのではないかと推測できる。元々大政所が秀吉に詫言をしたときに‘政権から利休を外さざるを得ない。表向きは処刑したことにするが、九州に追放して細川家?に居候させる。’というような説明をしていたのだろう。

‘利休流のお茶’についてだが、後に千少庵(利休の後妻宋恩の連れ子で娘婿)が確立したので、その時期には‘利休流のお茶’というのは無かったので、そのように解釈するには無理がある。(中村修也教授の説。)

- ・石田三成他の側近派(前田玄以ともいわれている)が秀吉に事件として取り上げて秀吉に讒言した?それを受けて秀吉が激怒し、最初は利休に蟄居を命じたが、最終的には木像を磔刑にして罪を公開し、逐電させたと思われる節がある。木像磔までは明らかであるが、それ以降の切腹他の経緯は諸説あり、多くは江戸以降のものであり、話を面白くするための脚色が多い?逃げ隠れでは物語にならない。
- ・木像を磔にしたことは新兵衛自身が見たことを 2 月 29 日に書いているし、大方の人が一致している。晒し首について書いていないのは、新兵衛が見た時に晒し首が無かったのだろう。晒し首他の追加情報があれば追加訂正が日記や書状に記載されていてもおかしくない。もしも新兵衛が晒し首を見たのであれば盗賊のものであって、利休のものではないと理解していたので書状に触れていないのだろう。
- ・晒された盗賊の首を利休のものと誤解されて世間に流布された可能性がある。(中村修也教授)
- ・‘利休が追放され、行方不明になったとか逐電した’という噂があったのは事実だろう。晴豊は‘突然逐電した’との噂を書いただけである。その後も切腹したとか斬首されたとかの噂を書いていない。その噂がなかったからだろう。
- ・切腹は武士として名誉のある死である。町人の利休を罰するのに名誉のある切腹をさせるはずがない。(晩年の秀吉ならやりかねないという説もあるが)しかも 70 歳の老人である。(現在なら 90 歳位?)

残酷にも斬首するというのはいり得るかもしれないが、斬首を切腹に言い換える理由は見当たらない。竹中重門は蟄居した堺で斬首されたとしているが、利休は堺から京都に呼び戻されているので聚楽第近くの私邸に戻っていたはずで斬首されたとすれば京都の自邸だろう。風聞が錯綜している一例である。

- ・豪商で一番弟子の茶人山上宗二は秀吉に処刑されている。理非曲直の発言(秀吉の茶道は悪趣味と酷評)、その後いくつかの経緯を経て斬首されたが、決して切腹ではない。

後に武士で茶人の古田織部は豊臣家との関係を家康に疑われて、(利休のように政権内での影響力拡大を恐れていたのが本当の理由?)切腹させられているが、斬首ではない。武士として名誉ある死である。

- ・不思議なのは利休の死に関して書いているは多門院英俊と竹中重門、北野杜家の3名だけであり、切腹は多門院英俊だけであり、しかも切腹以外に、高野山に登ったという風聞も書いている。

他の人は大事件のはずなのに死について書いていない。これら以外に大名や武士階級（特に上位者）、神主、僧侶等で日記を残した人は多く、しかもその中には利休を知る人もいたにもかかわらず、この大事件に関する記録がほとんど見当たらないことである。当時の人の中には利休の家族と付き合いのあった人や利休を知る人と付き合いがあった人も当然いたのに、聞き合わせが出来なくて、60年後に千宗佐が千宗旦や利休を知る人から聞き合わせ出来て事件の真実を知ることが出来たと解釈するのは都合が良すぎて、大いに疑問がある。

- ・徳川家康は事件の経緯を良く知り得た立場だったので、徳川幕府内に記録は残されているはずだろう。何故わざわざ利休の死に至る過程について千家にご下問したのか？
- ・木像磔刑により事件は京都中で評判になっていて、ほんのわずかの時間？で奈良にまで伝聞されていた。しかし密かに逐電させたとすれば、ほとんどの人は知らなかり、もし知っている人がいたとしても触れてはならないタブーだったのだろう。しかし、確実に切腹や斬首刑だったのであれば、触れてはならないことでは無く、三人以外にもっと記録した人がいてもおかしくない。「利休由緒書」の通りなら大騒ぎであり、誰もが知っているはずである。年代不詳だが‘毎日の見物が群衆をなす’と書き残した人もいる。その通りだと思う。少なくとも3,000人以上の軍勢が屋敷を取り固めたのであれば、多くの人が木像磔刑以上に知っているはずである。タブーではないので、日記をつける人は見たことや聞いたことを書いているはずだ。

6. 切腹の真相を推測する

- ・半世紀ほど後、表千家（利休の子孫）は利休および一族の名誉を守るために、都合のよい名誉の切腹と断定して、「千利休由緒書」を提出したとしても不思議ではない。（都合の悪い？）売僧の件は記載していない。由緒書は幕府の要請で提出したが、事前のすり合わせをしてから提出した？
- ・豊臣政権の評判が高いのに比して徳川政権は人気乏しかったので、‘秀吉は賜死に値する咎もなく、武士でもない利休を切腹させた非道の人’であるとの話は都合が良かったはずである。秀吉人気を貶めるためにこの話は都合が良かった？逃げ隠れであれば様にならない。
- ・そもそも咎は木像を大徳寺の楼上に安置したことで茶器の取引で不当に儲けたことであり、切腹させるほどではない。本当に切腹させたのであれば秀吉は非情の人である。半世紀後の表千家が切腹と断定したことで、話 題性のある切腹を前提に芝居や小説に取り上げられ、納得できる理由が組み立てられてきた。それが史実と思われるようになってしまった。大徳寺に安置された利休の木像は裏千家に保管されている。斬首や切腹に処罰されていたら、磔刑にされた木像も廃却したはずである。

- ・千小庵は3年後に秀吉に許されている。(利休死没時期か?) 利休の茶室が取り壊されることも無く表千家に移築され、それが‘不審庵’と名づけられた。切腹刑とはそぐわないと思われる。
- ・千利休由緒書に書いていることは信頼できる。軍勢取り固めの件もフィクションのメリットがないから事実だろうとされている。しかし、歴史家は徳川家の公式文書の「徳川実記」に「家光の実母は春日局」とあるが150年ほど?後に書いたものなので信頼できないとしている。60年後に書いている「千利休由緒書」は軍勢の件にかかわらず全てをどうして信頼できるのだろうか?学会では公式文書にもフィクションがあると認識あり?
- ・千利休由緒書に茶器の不当売買については記載されていない。子孫にとって不名誉なことを記載しないのは当然だろう。このように取捨選択されていることは確かで、追加されていることもあるだろう。また次女の奉公拒絶の話は秀吉が存命中はタブーだったので没後に語られるようになったのは理解できる。しかし、利休の木像から推察すると娘が類稀な器量という事に些か疑問が残る。秀吉からするとあまたの女性がいるのに30歳の子持ちの後家にどれほど秀吉が執着するのか?奉公(側室)を拒絶されて賜死を与えるほどの恨みを持つか?疑問が残る。また最初は利休の娘と知らなかったのが、利休を困らようとして奉公を命じたのではないと思われる。本当だったとすればお互いに気まづくなった要因の一つであろう。しかしながら、それを恨みに思い、木像問題を見つけて切腹させたというのは領けない。信長時代には利休が‘藤吉郎’と呼び捨て、秀吉が‘宋易公’と呼びかける関係だったが、立場が逆転してからは鬱屈した感情が相互に残ったのは否めない。奉公拒絶がしこりの1つになり、その他のことも重なり、秀吉の恨みが徐々に増幅し、利休の後ろ盾の秀長死没により一気に表面化したことは領ける。

7. 纏め

当時の資料を素直に解釈すれば、「咎は大徳寺の楼上に木像を安置したこと及び茶器の不当な利益を得たことで、罰は木像を磔にされ、高札で罪を明らかにされ、表舞台から抹殺され、逐電させられた」のだろう。逐電させても余命はほんの数年だったはずである。25日の木像磔から28日の死罪までが、わずか3日間である。命乞いをしなかったからとか、いろいろ解説もされているが、あまりにも短期間である。木像磔で利休に死の恐怖を示したのであろうが、短期時、間に斬首や切腹までに展開する経緯が納得し難い。同日に処するか、少し間をおいて、その間に誰かの助命嘆願、取り調べ等があってもおかしくない。

木像を磔刑にして一条戻橋に晒して京中が注目している中で、26日から28日まで屋敷を3,000人以上の軍勢が取り囲んでいたこと、まして切腹させたことを政権関係者のみならず京中の誰もが気づかないはずは無いし、知っていれば記録しないはずがない。事件当時の人が事実を聞き合わせできなくて、60年後に千宗佐が事実を聞き合わせできたとするのは歴史を評価する上で公平性に欠けると言わざるを得ない。ましてや、首を木像の足で踏ませて晒したのであれば、木像磔刑以上の話題性がある。誰も書かなかったのはそういうことが無かったからであろう。

木像磔の後、逐電させたが、公式説明がなかったので、憶測が入り乱れて、高野山に登るから切腹まで、推測に基づいて様々の噂となり、江戸時代以降は「千利休由来書」の切腹説がベースとなった。しかし切腹にまで至るほどの咎が分からない為、様々に憶測し、尾ひれもついてすっかり謎めいてしまったのだろう。

参考

利休の長男道安の堺千家は断絶。婿養子（後妻宋恩の連れ子で先妻お稻の六女お亀と結婚）の少庵が千家（京千家）を継ぐ。

少庵（京千家）の息子宗旦（中興の祖）の子息が継承する。宗旦の長男宋拙は前田家に出仕したが辞職後勘当され千家を出る。次男宋守が官休庵武者小路千家、三男宗佐が表千家不審庵、四男宗室が今日庵裏千家を継ぐ。

